

# 教育研究計画

1 学校教育目標 ・豊かな心 ・考える力 ・たくましい心 ・たくましい体

2 研究テーマ

自ら学び、自信をもって共に伸びる子の育成  
～「習得・活用・探究」をつなぐ指導と評価～

3 目指す子ども像 ～自ら学び、自信をもって共に伸びる子を目指して～

- (1) 基礎・基本となる資質，能力を身につけ，日本人としての文化を継承，創造していく子
- (2) 健全な価値観をもち，様々な集団の中で他と協調しつつ社会的に自立をしていく子
- (3) 自ら課題を見つけ，主体的，創造的に探究活動を行う中で，自己の生き方を考えることができる子

4 本校のカリキュラム

(1) 学習の自立を促す「教科学習」

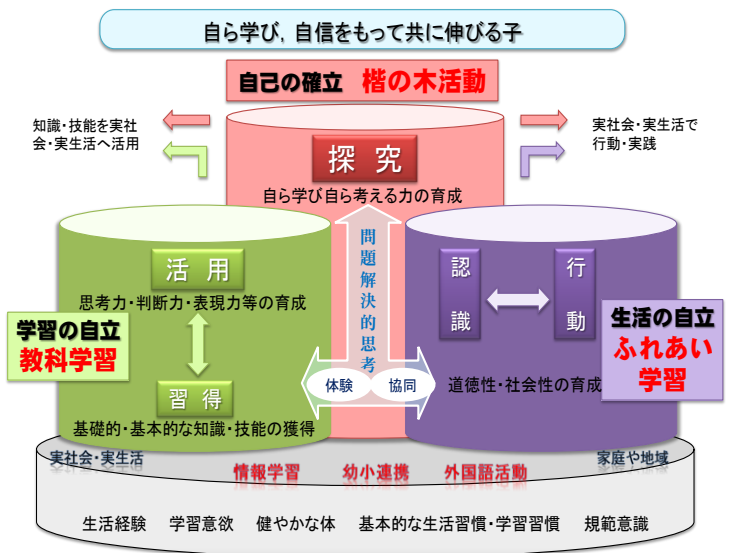
これからの知識基盤社会の時代にあって，一人一人の子どもが教科の系統性を踏まえた基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得し，それらを活用するといった多様な学習活動を通して，学習意欲を高めるとともに，思考力・判断力・表現力等の資質・能力をはぐくむ。

(2) 生活の自立を促す「ふれあい学習」

自らを律しつつ，他の人とともに協調し，他者を思いやる心や正義感，公正さを重んじる心，美しいものに感動する心，また，基本的な生活習慣や規範意識を身に付けることなど子どもの生活の自立を図り，社会の中で自己実現できる子どもを育成する。

(3) 自己の確立を促す「楷の木活動」

かけがえのない一人一人の子どもの個性を認め，尊重する中で，自らの生き方や在り方を考えていこうとする態度を育成するなど，社会的自己の確立を図る。



5 本年度の努力点

(1) 「習得・活用・探究」をつなぐ指導

過去3年間の「活用」に着目した研究では，単元で身に付けさせたい活用する力を明確に打ち出し提案してきた。それは，指導のねらいを明確にし，授業改善に生かすことがねらいである。そうした研究実践を積み重ねていくと，分析的思考や総合的思考，創造的思考や批判的（論理的）思考等，教科領域の枠を越え，単元間・教科間を総合・横断するような力が浮き彫りになってきた。このような思考を山森光陽氏は「問題解決的思考」とし，「問題解決的思考は創造的思考と批判的思考の大きく2つに分けて捉え，細分化することができる」と述べている。習得・活用・探究を貫く一本の柱としてこの問題解決的思考があり，これらを高めていくことが習得・活用・探究をつなぐには重要である。

今年度は，そのような教科横断的・総合的で単元連続的な思考の整理・集約を行い，各領域や各発達段階で付けるべき思考力を明らかにしていきたい。

## 【「習得・活用・探究」をつなぐ指導に関する研究の重点】

・・・・・・本年度の研究の重点Ⅰ・・・・・・

児童期6年間において、いつ、どのようにして、どのような問題解決的思考を身に付けさせるのか明らかにする。その上で、問題解決的思考を育成するための指導の在り方を探る。

習得・活用・探究は相互に影響し合い、子どもの中では常に往還しているものである。それらを効果的に関連付け、学ぶ意義や有用感の実感にまで高めていくことが求められる。そのための指導に重要なのが「思考」「体験」「協同」であると捉え、この3つの視点から指導の在り方を検討する。

### 「思考」

活用する力の中核でもある問題解決的思考に焦点化し、思考の様相を明確にする。

### 「体験」

学習してきたことの有用性を子ども自身が実感することができる、学びの総合としての体験を充実させる。

### 「協同」

共にみがき高め合い、学びを豊かにすることのできる、子どもにとって必然性のある協同を学習に生かす。

## (2) 習得・活用・探究をつなぐ評価 ～パフォーマンス評価を中心として～

習得・活用・探究をつなぐ指導に関する研究の視点の「思考」は高次な学力で、見えにくく量的に評価することが困難である。思考力・判断力・表現力等は子どものパフォーマンス（子どもの身体表現を含む様々な表現物など）として表出される。思考力など高次な学力を質的に評価する方法として、本校ではパフォーマンス評価を取り入れている。

パフォーマンス評価は、パフォーマンス課題とルーブリックにより構成される。パフォーマンス課題とは、学習者のパフォーマンス（完成作品や口頭発表、実技の実演など）によって高次な学力を評価しようとする課題であり、より複雑で現実的な場面や状況で知識・技能を使いこなすことを求める課題である。ルーブリックとは、どのような力をどの場面で評価するのかをあらかじめ定めておき、どの程度できれば目標に達したと見なすのか、その到達レベルを設定した評価指標である。その際、評価基準の各段階には子どものパフォーマンス例を記載しているので、その事例と照合することによって、評価対象である個々の子どもの目標の到達状況を把握することが可能となる。

本校では、このパフォーマンス評価を単元終末での総括的な評価に用いるだけでなく、形成的な評価にも生かすことを目指した。そのために、パフォーマンス課題は単元全体を規定するサイズの大きなものへ、また、ルーブリックについては単元の学習過程で複数回繰り返して使うことができるものへと改善し取り組んだ。そして、評価（Check）したことを次の指導や授業の改善（Action）に生かしたりすることを意識した。このように、PDCAサイクルを学習評価にも導入しそのサイクルの繰り返しから思考力等の育成に迫る。これまでの実践研究の課題を踏まえ、また、今年度は問題解決的思考の整理・集約を行い、各領域や各発達段階で付けるべき思考力を明らかにしていくことも鑑み、次のような研究の視点を挙げる。

## 【「習得・活用・探究」をつなぐ評価に関する研究の重点】

・・・・・・・・本年度の研究の重点Ⅱ・・・・・・・・

問題解決的思考を形式的に評価したり、単元指導の効果検証に生かしたりできる評価方法（パフォーマンス評価を中心としたパフォーマンスに基づいた評価等）を開発する。

この研究の重点に迫るために、「パフォーマンス課題」「ルーブリック」「活用・探究の評価方法改善」の3点から取り組む。

### 「パフォーマンス課題」

学びの文脈の真正性（本物らしさ、自然さ）を高めるパフォーマンス課題をつくる。学習課題と評価課題の融合したパフォーマンス課題にする。

### 「ルーブリック」

問題解決的思考に焦点化したルーブリックを用いて評価し、指導や授業の改善（PDCAサイクル）に生かす。また、単元指導の効果検証にも生かす。

### 「活用・探究の評価方法改善」

評価対象となる学力に柔軟に対応し、パフォーマンスに基づいた評価方法を開発する。また、複数の評価方法を組み合わせる。そして、カリキュラム評価も視野に入れた評価方法を検討する。

## (4) その他、今日的な教育課題に対応した教育活動の推進

- ・ 低・中・高学年の宿泊活動などの自然体験、学部訪問などの社会体験・本物体験の充実
- ・ コミュニケーション能力をはぐくむ外国語活動の充実
- ・ 情報モラル・情報スキル教育を体系的に推進する情報学習の充実
- ・ 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための幼小連携
- ・ 学校評価を取り入れたカリキュラムの改善

## 6 初等教育研究発表会

平成23年 2月 3日（木）午後 4日（金）終日

研究授業、分科会、講演、 その他外国語活動や幼小連携など今日的な課題に対応した公開授業

講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 田村 学 先生